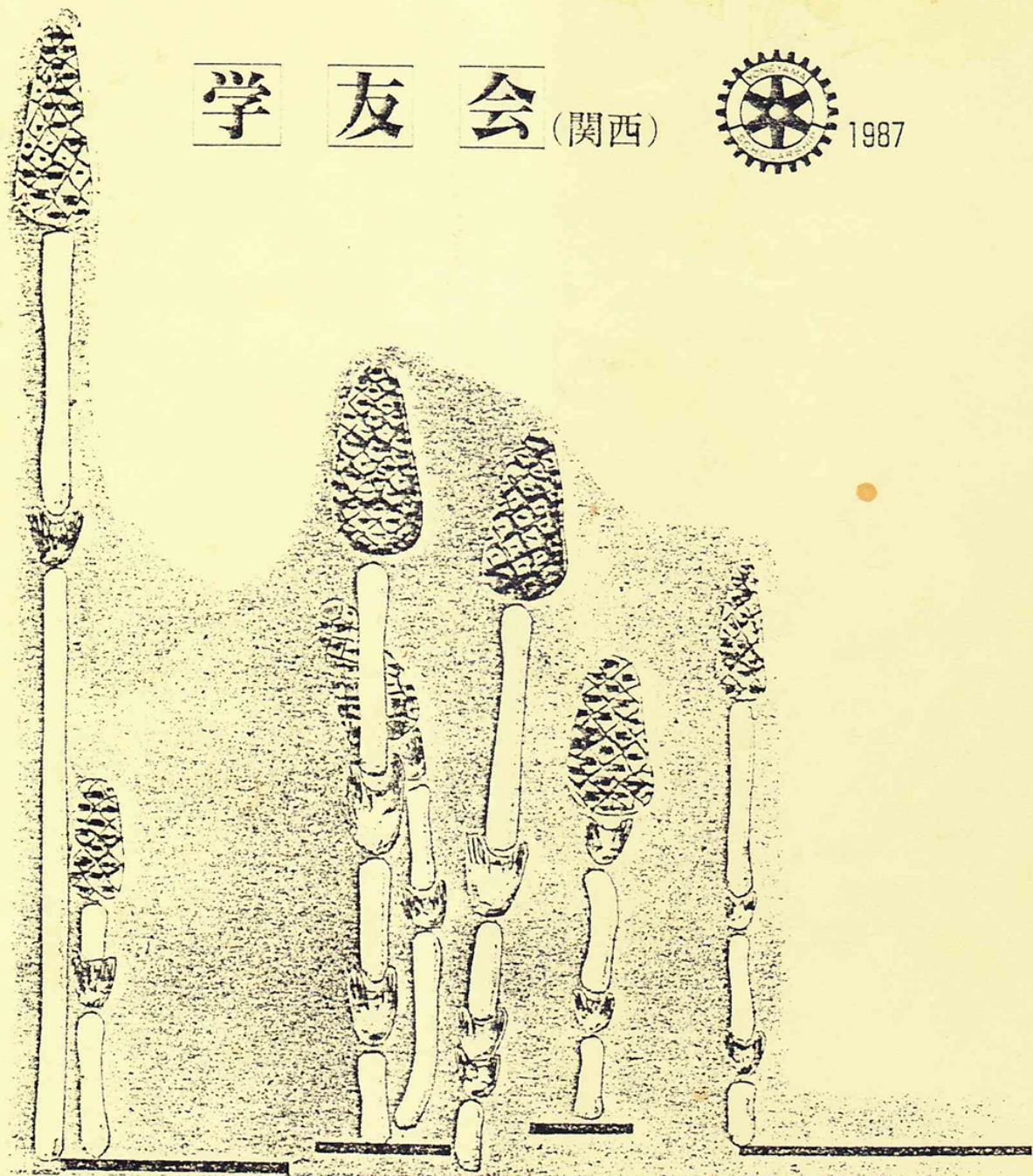


学友会 (関西)



1987



YO NE YA MA 1

目 次

ご 挨拶	重光世洋 (1)
発刊を祝して	原田秀雄 (2)
お祝いのことば	増田房二 (2)
友情のブリッジとして.....	中島治一郎(4)
喜びを一人でも多くの人に	佐々木勝順(4)
より多くの花を咲かせて	坂東 宏 (5)
親交の輪をより拡げて	坂田元記 (6)
国際親善に思う	林 錫璋 (7)
友好のかけ橋として新たな発展を.....	戴 肇洋 (7)
米山奨学生になつて.....	裴 貞烈 (9)
私の日曜日の1日	荘園福松 (10)
人間性の回復をめざして.....	清河雅孝 (11)
学友会の活動報告.....	魏 柏良 (12)
わが学友会への期待.....	大塚賢龍 (14)
編集後記	(S.S.)

ご挨拶

会長 重光 世洋

新緑若葉に映えて、こころよい季節となりました。皆様におかれましては益々ご研究、ご勉強ならびにお仕事にご精進されておられることとお慶び申し上げます。

本会は、元及び現米山奨学生間の交流を通じて親睦及び互助を促進すると共に、国際親善及び世界平和に寄与することを目的として設立されたものであることは、すでにご承知の通りでございます。（会則第2条第1項）

この目的に沿って、昨年の11月9日には、第266地区バスターガバナー伊瀬芳吉先生のご好意により大阪ダイハツディゼル（株）の食堂を会場として提供して頂き、会員間の親睦並びに国際交流事業の一環として、第一回の交流会並びに懇親会を開催しました。この会には、会員のほかに、多くの関係ロータリアン、ローターアクト、一般留学生皆様のご参加を得まして、まさに国際交流親善の有意義で、かつ楽しい一時を持つことができました。また、この度は、学友会創立一周年を迎えるに当たり、長い間、準備を重ねて参りました前述の学友会創立の趣旨に基づく活動の一環であります会員相互の情報交換をなすべく会報の刊行が、皆様のご支援とご協力のお蔭をもちまして、今日ようやく大地に芽を見ることになりましたことは、この上ない喜びでございます。この会報は、いうまでもなく会員相互の交流・連絡の広場であり、かつまた研究情報の交換の広場でもあります。これをさらに展開して、ロータリーの綱領で唱っておりますように、奉仕の理想に結ばれた人々が世界の親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進するかけ橋になればと祈願いたしております。したがって、会報の刊行が、末長く継続していくためには、まず、会員一人一人が好意と友情と理解をもって積極的に学友会を支え、育てていくことが何よりも大切ではないかと思えます。

会員のみなさん！ この会報がこれからも皆さんのために、各方面からホットなニュース、研究余滴、そしてすばらしい国際親善と交流に関する情報や提言を運んでくれるよう、育ててやって下さい。皆様の暖かい陽光と甘霖で、このグリーンの表紙と土筆（つくし）が象徴しているように ” 国際理解と親善そして世界平和 ” を愛する心の芽を！

最後になりましたが、この創刊号には、財団法人米山記念奨学会副理事長原田秀雄先生、同常務理事増田房二先生を始め、各地区のガバナーでおられます中島治一郎、佐々木勝順、坂東 宏、坂田元記先生各位よりご寄稿と励ましのお言葉を沢山顶戴しております。そして、姜淑子幹事には、まさにこの会を象徴するかのようすばらしい表紙をデザインして頂きました。この紙面をお借りして、皆様に対し心より厚く御礼申し上げます。

発刊を祝して

(財)ロータリー米山記念奨学会

副理事長 原田 秀雄

米山奨学生学友会(関西)の会報が発刊されることを伺い、心からお祝い申し上げます。ここまで事を運んだ幹事の方々の並々ならぬ御努力に敬意をさそげます。

元来、この種の会合は互いに集まり語り合い、旧交を温め新しい友を見出し、人生の機会を重んずるのが目的であり、併せて各自の事業上の問題、あるいは研究上の意見の交換を行なうもの、あるいは生活上の相談等もあるかも知れないが、何れにしても何のわだかまりもなく、これ等が話し合えれば幸いである。お互いに若いうちは左程に思いはないかも知れないが、段々同時代、同年代の友が減少して行くに従って、追々友も少なくなるにつれてこの種の会合が極めて貴重なものに思えるようになるものである。

この機会はどこまでも大切にして行く必要がある、と同時にその会合に何かの事情で出席出来なかった友のために簡単な記録を残すことも大切で、会報の使命は重大である。何事でも歴史が重んじられるが、会報の類がなければ歴史は作られない。十年、二十年と重ねてこそ意味が重大になる。この仕事の後継者にその人を得ることは極めて大切に思われる。

一言述べてお祝いのことばといたします。



お祝いのことば

(財)ロータリー米山記念奨学会

常務理事 増田 房二

学友会(関西)創立1周年にあたり、記念すべき会報が創刊されますことを心からお祝い申し上げます。

米山奨学会では、1983年から、財務、学務、広報、学友の四つの専門委員会を設置しました。これは奨学会の事業の拡大に対応して、それぞれの分野で担当する事項を定め、専門的に研究討議して、業務遂行の適切な豊作を理事会に提案することを目的としております。この中で学友委員会の第一の使命は、現・元米山奨学生による学友会の結成を推進することにあります。

米山奨学会は、日本の国内の各地に在住する現・元米山奨学生の皆さんによって、それぞれの地域で学友会が作られて、学友同士の交流と親睦が深められ、その経験を生かして、母国へ帰られた後も各国で学友会活動の輪を広げて頂ければ、日本の国内のみならず、国際的にも学友同士の交流が可能になって、国際間の相互理解に貢献できるであろうと期待しております。

幸にして先ず1985年11月に学友会（関東）が結成され、これに続いて1986年5月に学友会（関西）が、そして同年11月に学友会（北関東）が相次いで結成されて、次第に全国レベルの組織化が整って参りましたことは慶びに耐えません。学友会結成の為に涙ぐましい程の情熱を注ぎ、努力を惜しまれなかつた重光会長や、魏幹事長を始め、諸準備に献身されました方々の並々ならぬご苦勞の有様を、私は初めからつぶさに拝見して、ほんとうに頭の下がる思いでございます。いま会報第1号を発行されるにあたって、その嬉しさは察するに余りがあります。あらためて深く敬意を表し、感謝の意を表します。

米山奨学会に対する全国ロータリーアンの支援も年々強められて参りました、奨学事業の発展は目覚ましいものがあります。10年前の1977年度は奨学生 230名であったものが、1986年度は 380名に達し、今年度は遂に 500名に及ぶ予定でありまして、このことは、学友会の基盤がますます強固なものになることを意味します。

しかし、多国籍の会員をもって構成される学友会は、結成することの困難さ以上に、維持することに一層大きな努力を要することは申すまでもありません。その意味においては、学友会団結の象徴となるのが会報でありますから、学友の皆さんがひとりひとりこの会報の広場に顔を出して、友情を暖めて頂きたいと思ひます。

ロータリーには、瞬間の出会いを大切に、それを永遠のものにしようという信条があります。学友会活動は正にその実践であります。

昨年11月、第 266地区伊勢芳吉バスターガバナーの特別のご好意により、大阪のダイハツディーゼル株式会社の食堂を提供頂いて開催された第1回懇親会には、米山ばかりでなく、米山以外の一般の留学生も多数参加されて、関係ロータリーアンを交えて和やかな交歓が行われ、各国の珍しい風俗習慣を紹介したり、歌を披露したりして懇親を深めたことは、米山奨学生の仲間同士だけでなく、一般の留学生に対しても、学友会がプロモーター的役割を果たして、広く国際間の親善と相互理解に貢献する可能性を示唆したものとして、極めて印象深いものであります。学友会活動に大きな意義と夢があります。会報創刊にあたって、学友の皆さんのご健勝を心からお祈りして、お祝いのごことばといたします。



友情のブリッジとして

国際ロータリー第 264地区

ガバナー 中島 治一郎

米山奨学生学友会の会報創刊お芽出度う存じます。

私達 264地区のロータリーアンは、米山奨学会へ常にハイレベルの協力を続けて参りました。平和への最高の手段の一つと考えているからであります。特に近い将来、アジアへの窓口として大きく開かれます関西新国際空港の地元として、アジアの平和の為に絶対不可欠な国際分業を仲良く果して行くのに、ますます相互理解の必要性を痛感しており、米山奨学会への情熱は尚一層燃え上ると信じます。

人間と云うものは、信念を持って奉仕しておりましたが、その効果と申しますか、反応を確かめ度くなるもので、皆様方のこの会報で如何に私達の奉仕が報われているかを知る事ができると、好循環が起こり、いよいよ米山奨学会への理解と協力が得られるようになると存じます。また、単に我が国とアジア各国との理解のみに終らず、アジア各国間の相互理解と友好を深める為にも、この会報の果すことの出来る役割は大きいと思います。

この会報が、出来るだけ多くの人達の善意のメディアとして、また友情のブリッジとして育ってくれる事を心から念じます。



喜びを一人でも多くの人に

国際ロータリー第 265地区

ガバナー 佐々木 勝順

米山奨学生の方々が学友会を創設されて一周年を迎えられ、その活動の一環として新しく会報を発行されることは誠に意義があり、同志が親睦と友情を一層深められる為に、大いに役立つものと存じます。又同時にロータリーの精神を何時までも忘れることなく終生喜んで頂くならば、我々は皆さん方の勉学心に対し僅かばかりのお手伝いをさせて頂いたただけなのに、それを善意と受け止められ学友会を結成されたことは只々有り難いことだと思っております。どうぞ何時までも仲良く互いに励まし合い、ご自分の研究を生かして頂きたいと存じます。

私は米山奨学生の選考会に出まして多数の希望者の中から僅かの奨学生を選ぶつらさが身にしみて感じております。皆立派な青年であり向学心に富んだ人ばかりなのです。この中から皆さん方は将来を嘱望されて選ばれた理由ですが、無念ながら選ばればかった人達のことを忘れないで頂きたいと思います。彼等は恵まれなかったけれど頑張っておるのです。恵まれた人はただ喜んでおるだけでは彼等に対して申し訳ないと思います。それだけ勉学に努力して頂くと同時により一層ロータリーの精神を理解し、将来は自分のうけた喜びを一人でも多くの人に奉仕して頂きたいと存じます。

奉仕は感謝の現れであり、心の問題なのです。その仲間が集まることによって世界の平和に必ず役立つものと確信しております。その橋渡しが機関誌なのです。どうぞ何時までも頑張ってください。



より多くの花を咲かせて

国際ロータリー第 266地区

ガバナー 坂東 宏

東京ロータリークラブの創立者である米山梅吉氏の功績を記念して創立された米山基金が、米山奨学会へ発展し、遂にはロータリー米山記念奨学会という名称の財団法人として確立されたのが昭和42年で、丁度その時から満20年が経過しております。その間、主としてアジア地域からの私費留学生に対して、多大の援助を与えていることは皆様御承知の通りであります。そして、その援助の最大の目的は、米山奨学生の卒業生達が実社会に出て活躍する時、奨学生時代に知り得たロータリー精神を更に発揮し、世界平和のために貢献して戴きたいということでありまして、我々ロータリーアンの切に希望するところであります。

一年前に米山奨学生学友会（関西）が発足したことは、この希望に一層の明るさを加えるものでありまして、大変結構なことと存じております。

今回は更に、同会を充実させるため会報が発刊されることとなりました。誠にうれしい限りです。

先日、3月27日～29日宮崎において行われた日韓親善会議においても、分科会で米山奨学生の問題が討議され、現在、米山奨学生の割合からゆけば半分近くを占めている韓国よりの留学生が、帰国してもその土地のロータリークラブと連絡がとれないことがわかり、

国際親善に思う

副会長 林 錫 璋

この頃、半導体問題で日本がまた槍玉にあがっている。より良い品を作り安い価格を提供しないで、金持ちを憐むのは言語道断であるとする者も少なくない。しかし、双方の立場を先に理解せずに直ちにこのように思うことは、いささか行き過ぎではないかと思う。経済大国になり世界をリードしなければならない日本が、食糧制度など保護策をとりながら、アメリカにたいしては保護貿易をとるべきではないと主張しているからである。

国際親善の舞台では、いつも和やかな雰囲気が終わっても、国際貿易交渉の場では火花のちる場面をしばしば見かける。何のための国際親善であったのかと不思議に思う程である。私たちの日頃の国際親善もこのように終わってはいないか、と疑問せずにはいられない。最近、どの大学や民間においても、国際化や国際人とやたらに国際という言葉がはやっている。しかし、本当に国際人（法人を含む）にならうとするなら、単に英語を流暢に話し、外国人と頻りに交流を深めるだけでは足りません。国籍を越えて互いの文化を良く理解して付き合わなければなりません。現地会社では日本人以外の者を重用しないとか、日本国籍をとらないと正規に採用しないような会社は、民族主義のかたまりであり、真の国際人とは言えない。

私ども米山奨学生学友会は、国際親善を目的としておりますが、形式行儀的親善にならないように努め、互いの文化を尊重理解し、忌憚なく欠点を正しあい、真の友情を深めたいと常々思っております。



友好のかけ橋として新たな発展を

戴 肇 洋

不幸にして現在国交断絶になった中華民国（台湾）と日本は、既に皆様ご存じの通り、歴史的・地理的などの面から見ると、切っても切れない深い関係が昔から続いてきたと思います。いいかえれば、今日の日華関係は奇妙な歴史的条件下に産まれたものである。従って、日華関係を向上させようという力はなんのでしょうか。一体どのような魅力が戦後に植民地の暗い影を追い払い、昔の不幸を乗り越えて、両国の国民の心を繋いでいるのでしょうか。

.....

いうまでもなく、現在の我が国の多数の人達は、日本に対してなおも、何かの偏見と差別を持っているが、これは取りもなおさず過去日本が我が国侵略の残酷な記憶を忘れることができないからであろう。これは実に忠貞愛国の士の避けることのできない気持ちであり、我々としてもその気持ちを体することができるのである。それ故に、話が近代日華関係に及ぶごとに、我が国の人士が怒りを覚え、日本を非難する気持ちを押さえることができないのである。しかしながら、我が国の古き諺に「人の相い知るは、心を相い知るを責ぶ」とあり、「己を知り、彼を知れば、百戦百勝す」とあるのである。我々も感情の上で日本がきらいだからといって、日本のすべてを軽蔑してはいけないのである。話をかえて、日本は近代化において軍閥に政権を掌握されたため、我が国の敵となったのであるが、実際に、今日においての一般の日本国民は感情の上では我々の心情を理解しているのである。

こうしたことから、両国の貿易や経済協力、文化交流、人物往来などが逐年増加の一途をたどるなど、日華両国の実務関係が提携親善の度を深め、めざましい発展を遂げておりますことは、まことに同慶に耐えないところでございます。

一方、日本は今、アジアにおいて唯一の経済先進工業国であり、一人当たりの国民所得はすでに一万米ドルを超えました。我が国も一人当たり四千米ドル近くに到達し、新興工業国の一員として日本との相互依存及び補完的關係のもとで互いに輝かしい新記録に向かって邁進しているのが現状である。

現在、我が国は、政治の民主化、富の均等化に努力され、政治の安定とともに経済、貿易の発展を目指しております。これからも、世界の経済と社会平和の発展のために、地理的に最も近い隣国である日本との相互理解ならびに一層広範な交流と親善に微力を尽くして行きたいと思っております。

最後に、私は祖国を離れ、日本に留学し、この度大東ロータリークラブの御恩恵と推薦により、名誉ある米山記念奨学生の一員として選ばれたことは、誠に有り難く思っております。これからは、この御援助に背かずには勉学に励んでいきたいと思っております。将来、帰国後は学ばせていただきましたあらゆる知識をもとに、国において代表する人物になれるよう努力し、国の発展と平和に寄与したいと考えております。そして、ロータリーの精神を守って、社会に貢献し、両国の親善のために全力をつくし、世界人類の平和に貢献したいという強い気持ちを胸にいだいております。(現奨学生 関西大学大学院)



私の日曜日の一日

副会長 莊園 福松

いつも、ローマの休日のような休日はないかなあと思う日曜日の一日、一週間の疲れと、心や身体についた垢をおとすための一日とボヤク人達はまだいい、素晴らしいローマならず、「大阪の休日にもなりえよう」こんなうたい文句は私には通じない。

自由業者の私は一番不自由なのは実情だろう。

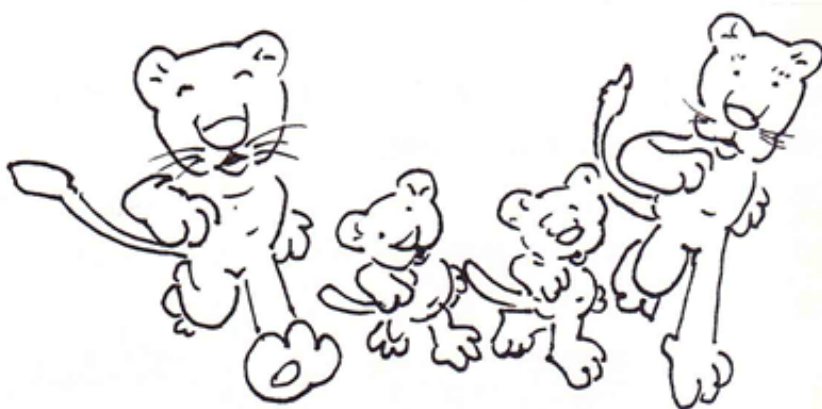
周期的にネグラをきめこむことに左程の魅力もない、働き蜂のように、休みなく働くのが好みでもない。而し、ほんとうに何もかも忘れて休める日曜日は指折り数えても少ない。昔の人のように、天行に合せて休むのが自然かもしれない。カレンダーの上で休む現代人も気の毒だが、その谷間にはさまれている私のようなものは一体どういう社会に属する生物かと、休めないときにつくづく思う。

閑話休題、でも休日の日もある。子供にせがまれて、ババ孝行をはげむときはこちらは実際心は上の空で、はしゃいでいるのは子供だけである。ババを引張り出したことで子供たちばかり、ママに大きな顔をして、すきなものをせがむ、我が家の日曜日の一日の一面相である。

ときどき、知らん顔をしてひとりねようものなら天下は大乱しそう、ませている今の子供はママより以上にババを管理する。これには口答えも出来なく喧嘩にもならない。唯唯諾諾、猿まわしの猿である。休むどころの騒ぎじゃない。

いきは、忙しくなるばかりで、休むということも、日曜日ということも、何だか学生時代の遺物のようになってしまうそうだ。

これが私の日曜日の一日です。



人間性の回復をめざして

副会長 清河 雅孝

われわれの先祖は、莫大な文化遺産を残してくれたが、それも産業革命、大量生産の時代に突入するまでのことであった。アテネのメリアポリス、吐魯番近郊の交河古城、イスタンブールのピエール・ロッチェの岡にたつと先祖の崇高な魂がよみがえって来る。現在大都市にあるスラム街のコンクリートの廃墟には、文化退廃の悪臭が漂っている。先人は、石や土など自然の材料を用いて多くの芸術作品を創り上げた。コンクリート、セルロイド、プラスチックは、われわれに非常な快適さと便宜を与えてくれたが、われわれの子孫に何も残さないであろう。今、もてはやされているコンピューターは、人間の知恵の結晶と言われている。これは、一体なにを創造し得るのであるか。百年後、二百年後に残ったものがみにくい人間の記録でなければ幸いである。

産業空洞化が叫ばれている現在ではあるが、危惧すべきは産業空洞化ではなく、人間の魂に触れることを忘れた文化の空洞化であろう。産業資本から金融資本へと転換するときは、社会が衰退の道を辿るときである。これは、運命であろう。ベルギーやオランダはこの道を歩んだ。ポルトガル、スペイン、イギリスもこの運命の魔手から逃げることはできなかった。しかしこれらの国は、いずれも産業が空洞化するまでに、おびただしい文化を創り、かれらの子孫に残している。もし産業空洞化が進めば、人々の力で支えられてきた企業は、何を創り出しわれわれの子孫に何を残してくれるのであろう。

昔は「余人を以て換えがたい」という言葉がよく聞かれ、この言葉に励まされて他人のために無条件に奉仕したものである。組織原理が徹底している今日の社会では、人間は組織のパーツ化し、この言葉は本質的に死語に近くなった。「われわれは組織のために存在したのは組織もわれわれのために存在する」という時代はもはや古き良き時代となった。組織と個人との完全調和もあるいは懐古主義者の夢になるかもしれない。残滓のように青春のエネルギーを吸い取られ、組織から吐き出された戦士が路道に迷う日は決して遠くはない。多くの企業は、国際化の美名の下に彼らを暖かく育てくれた祖国や同胞に別れを告げ、世界に雄飛しようとして営々と仕度しているからである。

友よ、語らんか。世間の拘束を打破し人間性の回復をめざして再び集わんかな米山奨学生学友会のもとに。



学友会の活動報告

幹事長 魏 柏 良

一年前の1986年5月11日関西地区においての米山奨学生学友会（関西）が発足されました。創立準備当初は色々な問題を抱えておりましたが、度重なる議論の末、理解と協力によって、国際理解と親善をモットーとする学友会が生まれたのです。

会員の役割は、ロータリー精神および米山梅吉先生の理想とされた国際理解・親善および平和の実現を促進し、さらに国際的友好を維持または発展させる環境作りの先頭に立つことです。この役割を果たすために学友会のメンバーは、この一年間微力ながらも若干の成果を修めることができ、まずまずのスタートと思っています。

我々学友会の活動は、会の相談役の諸先生方の積極なご援助とご協力によって支えられてきました。この紙面を借りて、心から感謝の意を申し上げます。特に、先見明な知恵をもって学友会の創立に力を注いでくださった米山記念奨学会常務理事増田先生、そして学友会の催しに対し物心両面の援助を頂いた当会の相談役伊瀬バスターガバナー及び第266地区米山奨学委員長木梨先生、さらに幹事会の開催に日曜日を返上して会場を提供して頂いた難波ロータリークラブ谷口 勉先生皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

ここで、この一年間における学友会の主な活動をご報告したいと思います。

昨年8月には、真夏の日射しがまぶしい千里丘にある青少年の家の緑地の広場で、大阪地区ローターアクト主催の野外料理大会が開催されました。我が会員も30名ほどが参加し、日本の若者と共に楽しいひとときを過ごしました。この料理大会はコンテスト形式で、10人前後のグループを作り、それぞれの場で料理材料リストをもらい、どのような料理を作るかを考え、各自の役割を決めて、グループとしての腕前をふるい、できあがった料理を味覚は勿論のこと、視覚的な美しさも競い合うというものでした。参加者がそれぞれアイデアを出し合い、決定し、協力し合って完成品をめざすというプロセスの中で相互の意見交換、信頼、協力という人間にとって最も重要な行動を学ぶことができたと思います。

昨年の11月には、小雨の降る晩秋の一日は学友会主催の親睦会を開きました。関西4地区のロータリー関係者と大阪地区のローターアクトの多数の方々の出席をいただき、また会員以外の留学生も多数参加して、約6時間にわたり、有意義な時をすごしました。午前の部は、「国際理解へのアプローチ」というテーマで、まずは”自国の結婚の習慣”について取り上げ、中国、韓国、スリランカ、日本のそれぞれの国の結婚に関する習慣などを紹介し合い、なごやかな雰囲気の中で自分の国とは異なった文化の断片を知ることができました。また午後の部は、親睦パーティで、それぞれの国の歌や留学生による台湾の二弦胡琴による独奏や伴奏などを披露し合い、お互いの気持ちが溶け合って、午前の部とは

また一味違ったムードの中で親睦を深め合うことができました。とくに、この中で、第266地区ガバナー坂東 宏先生の美声よる独唱で”四季の歌”を拝聴できたことはとても印象的でした。喝采！感謝！

これら以外にも、各地区のロータリークラブの行事に参加させていただき、学友会の紹介および活動の重要性を訴える機会を得ることができました。今年度の学友会の活動は、会員同士の親睦交流の場を多く設けるとともに、さらに新鮮で中味の濃い国際親善をはかっていきたいと思っています。

米山記念奨学会の目標を達成するためには、学友会も重要な役割を果たすものと思います。我々米山奨学生は在日期间中、奨学金を受けたことにより、それぞれの研究勉学に専念でき、帰国後においても各方面で活動する原動力になっていることと思います。しかし、支給期間が終われば、「金の切れ目が縁の切れ目」となり、奨学会の目的やロータリーの精神までが過去のものになりがちです。ロータリアンの皆さんは、国際的な理解と善意を認識し、人道的立場にたつ奉仕として貴重な金銭を寄付していらっしゃると思います。このことを思うと、学友会としてもロータリアンの皆さんの善意を生かすことを忘れてはいけません。したがって、学友会の役目はロータリアンの精神を受けづき、各国の人々の友好と理解を深め、育成してゆくことであると考えます。

会員の皆さん、今後とも力を合わせて平和の基盤となる国際間の友好関係の確立に向けての理解と協力の精神を発揮するよう、この紙面を借りて呼び掛けたいと思います。



創立総会(1986.5.11)

交流会(1986.11.9)

わが学友会への期待

幹事 大塚 賢龍

この度、米山奨学生学友会（関西）の発足にあたって、“学術”担当に任ぜられ、責任重大であり、光栄に存じます。初仕事として、この会報の発行ですが、なにしろ、未熟ですので、どこから始めれば良いか、右往左往しているところ、重光会長を始め、幹事皆様の絶大なるご尽力のおかげによりまして、この創刊号の生まれる瞬間を会員皆様のご期待に答えるように印刷ができました。編集、タイプ、印刷、製本といった一貫の作業は重光会長の自らの手によるものでありまして、担当幹事としては頭の下がる思いで胸が一杯であります。次号には、担当者としてしっかり頑張りたいと思います。

私は米山奨学生として昭和53年から55年まで3年間を大阪府立大学経済学研究科でマーケティング論を中心として勉学の機会を得ました。日本への留学に来た目的の1つは日本を知ることでありました。高度経済成長を成し遂げた日本は物質・量とも豊かになり、一般の生活もたいへんよくなっています。発展途上国から来た私にはうらやましいかぎりでした。しかし、私が最もすばらしいと感じたのは、やはり、日本の自然、伝統文化、日本的な心などでした。

現在、私は大学で教鞭を取りながら、常に視野を広く持ち、多くの人、多くの情報・文化に接し、人の心や考え、異文化や未知の情報を大幅に採り入れるよう努力しています。これからも、ぜひ、この学友会での学友相互間の“学術”を通じて、この会報の発行により、各国の伝統や学風を各会員に伝えることができれば幸甚だと思います。

会員皆様におかれましては、日本滞在中は健康にも留意して、勉学、仕事、事業などを精一杯頑張ると同時に、現・元米山奨学生としてのプライドとマナーも常に心をかけて、国際社会に雄飛するための国際親善につとめて頂きたく思います。

◆◆◆寄稿のお願い◆◆◆

次号（第2号）は昭和62年10月下旬出刊の予定です。皆様のご寄稿をお願いします。

○テーマ：何でも結構（随意）

○原稿用紙（400字詰め）3枚以内

○宛先：米山奨学生学友会（関西）編集部

〒542 大阪市南区千日前2丁目5-2（歯科センタービル6階）

国際ロータリー第266地区ガバナー事務所内(06-632-0266)

▲締切：昭和62年9月15日

「東海大学史」の発行に際しては、編集委員の御尽力により、誠にありがとうございました。また、編集委員の御尽力により、誠にありがとうございました。また、編集委員の御尽力により、誠にありがとうございました。

◇予定の期限内に原稿がなかなか集まってくれないことと資金の欠乏で、自家手製をやむなくされました。

◇それにしても素人の不慣れな手でなんとか会報らしきものができあがったものだと思います。さて、如何がでしょうか。

◇時間と労力そしてセンスも必要です。また色刷りでよりスマートな会報となるには費用がかかります。会員皆様の物心両面のご支援は欠かせないものです。

◇それには、少なくとも年会費の納入を是非ともお願いします。

◇昭和62年10月に第2号の発行を予定しております。ご寄稿を。

◇編集に対するご意見をどしどし編集部までお寄せ下さい。

◇表紙は7色刷りの予定でしたが、諸般の事情により今回は割愛させて頂きました。では次号をお楽しみに。(S.S.記)

東海大学歴史部

張勝意

台中市东海大学95号信箱

TEL (04) 2560254 (0)
(04) 2560492 (H)



ROTARY YONEYAMA SCHOLARSHIP ALUMNI ASSOCIATION

事務所：米山奨学生学友会（関西）
〒542 大阪市南区千日前2丁目5-2（歯科センタービル6階）
国際ロータリー第266地区ガバナー事務所内
電話 大阪(06)632-0266